

問七

——3について答えなさい。客に対して反抗的な態度をとっていた竜太が「いまでは客をよびこむ誘致活動に加担」するように変化したのは、彼の考え方が灯子の発言を聞いて大きく変わったからだと書かれています。竜太の考え方はどう変化したのですか。解答らんのAには、反抗的な態度をとっていたころの竜太の考え方を、Bには、灯子の発言を聞いたあとの考え方を書きなさい。それぞれ本文中の言葉を適切に用いること。

四

あなたがいま住んでいる地域ちいきについて、考えてみましょう。今後十年間で、地域はどのように変わっていくと予測しますか。一八〇字以内の文章で、あなたの考えを書きなさい。

※解答には、変化するであろう点と、そう予測する理由の両方をふくめること。

※原稿用紙の使い方に従って書くこと。ただし、改段落をする場合は行をかえず、一マス空けることで示しなさい。

※現在住んでいる地域のことをよく知らない場合は、これまでの居住地の中から一つ選んで書いてもよいことにします。

る。

……やっぱりな。

航平は強い風にシャツをはためかせながら、そのデッキに立ち、港側でそれとなく見送っている島の漁師たちにかかるく会釈すると、船室にはいつていく。港をでて波がしらの立つ沖にむかつていく定期船を目で追いながら、きょうの定期船はゆれるぜ、と、竜太は心の中でつぶやいた。背中から、

「話すことはだいたい、こんなもんだな」

という声がかきこえてきた。トクさんの話が終わったようだ。

(杉本りえ「明日は海からやってくる」より)

※出題の都合上、本文の一部を改稿しています。

〈注1〉 ローカル…一地域に限った。

〈注2〉 風貌…すがたかたち。容姿。

〈注3〉 きつすい…まじりけのないこと。

〈注4〉 本土…その国の主な国土。離島などに対していう。

〈注5〉 沖あい…岸から遠くはなれた辺り。

〈注6〉 民宿…小規模の宿泊施設。一般民家が家族で経営することが多い。土地の特産物や自家製の料理を提供し、郷土色豊かで家庭的なサービスをすることを特徴とする。

〈注7〉 ブース…間仕切りをした小さな空間。

〈注8〉 了見…考え。思慮。

問一 ……部1〜6を、起きた順に並べかえなさい。

問二 空らん[A]〜[E]にはそれぞれ、「辰島」か「倉部」のどちらかが入ります。「辰島」は合計何回入りますか。算用数字で答えなさい。

問三 辰島にあるものを次からすべて選び、記号で答えなさい。

ア 観光ホテル

イ 公民館

ウ コンビニエンスストア

エ 神社

オ スーパーマーケット

カ 動物病院

キ 百貨店

ク 港

問四 竜太はトクさんの人柄・風貌・行動などをどのように感じていますか。(1)〜(3)それぞれから、あてはまらないものをすべて選び、記号で答えなさい。

(1) ア 温厚	イ 聡明	ウ 偏屈	エ 優雅
(2) ア 狡猾	イ 壮健	ウ 辛辣	エ 精悍
(3) ア 紅顔	イ 篤実	ウ 尊大	エ 朴訥

問五 1について答えなさい。竜太は、トクさんが「がんばった」理由は何だと思っていますか。理由として本文中から読み取れるものには「○」、読み取れないものには「×」を書きなさい。

ア 島の宣伝ともなる新聞を中学生が作ろうとしており、それを後押ししたいから。

イ トクさんは口下手で、話すのが苦手だから。

ウ 話をきく中学生が、自分の話を楽に、正確にノートにまとめられるようにしたかったから。

エ 島を出て行った自分の娘や孫が、島にもどり、また一緒に住むよう思い直してほしいから。

オ 未来を背負う島の子どもたちが島を知ろうとしており、うれしいから。

カ 漁師を引退したトクさんにとって、辰島にできるせめてものことだから。

問六 2について答えなさい。「客がくることをきらっていた」のは、辰島が竜太にとって、どのような存在だったかからですか。本文中から、辰島がどのような存在だったか表す四字以内の言葉を、二つぬき出して書きなさい。

問七 2について答えなさい。「客がくることをきらっていた」のは、辰島が竜太にとって、どのような存在だったかからですか。本文中から、辰島がどのような存在だったか表す四字以内の言葉を、二つぬき出して書きなさい。

問八 2について答えなさい。「客がくることをきらっていた」のは、辰島が竜太にとって、どのような存在だったかからですか。本文中から、辰島がどのような存在だったか表す四字以内の言葉を、二つぬき出して書きなさい。

問九 2について答えなさい。「客がくることをきらっていた」のは、辰島が竜太にとって、どのような存在だったかからですか。本文中から、辰島がどのような存在だったか表す四字以内の言葉を、二つぬき出して書きなさい。

問十 2について答えなさい。「客がくることをきらっていた」のは、辰島が竜太にとって、どのような存在だったかからですか。本文中から、辰島がどのような存在だったか表す四字以内の言葉を、二つぬき出して書きなさい。

問十一 2について答えなさい。「客がくることをきらっていた」のは、辰島が竜太にとって、どのような存在だったかからですか。本文中から、辰島がどのような存在だったか表す四字以内の言葉を、二つぬき出して書きなさい。

問十二 2について答えなさい。「客がくることをきらっていた」のは、辰島が竜太にとって、どのような存在だったかからですか。本文中から、辰島がどのような存在だったか表す四字以内の言葉を、二つぬき出して書きなさい。

問十三 2について答えなさい。「客がくることをきらっていた」のは、辰島が竜太にとって、どのような存在だったかからですか。本文中から、辰島がどのような存在だったか表す四字以内の言葉を、二つぬき出して書きなさい。

問十四 2について答えなさい。「客がくることをきらっていた」のは、辰島が竜太にとって、どのような存在だったかからですか。本文中から、辰島がどのような存在だったか表す四字以内の言葉を、二つぬき出して書きなさい。

問十五 2について答えなさい。「客がくることをきらっていた」のは、辰島が竜太にとって、どのような存在だったかからですか。本文中から、辰島がどのような存在だったか表す四字以内の言葉を、二つぬき出して書きなさい。

問十六 2について答えなさい。「客がくることをきらっていた」のは、辰島が竜太にとって、どのような存在だったかからですか。本文中から、辰島がどのような存在だったか表す四字以内の言葉を、二つぬき出して書きなさい。

そのまま書かれていた。

「あ、べつに、¹ トクさん、がんばったんだなと思って」

トクさんは、話したことを灯子そのまま書きうつせるように、あらかじめまとめてきていたようだ。

「うん。助かる」

といって、灯子がほほえむ。

みんな、いっしょけんめいなのだ。でもいっしょけんめいの度あいでは、灯子はきわだっている。

トクさんががんばったとはいったけれど、ほんとうは灯子のほうがずっとがんばっていると思っっている。

灯子には、なにごとにもひたむきに取り組むようなところがある。結果がともなわなかったり、不器用なところもあるけれど、ともかくけなげにがんばる。この島にきてからずっと、この地にとけこもうとして、理解しようとして、いっしょけんめいだった。

その姿勢に、竜太はいつのまにかひきずりこまれていた。いうことがあまりに正論すぎて、時にはむかつくこともあるけれど、助けてやらずにはいられない気持ちにさせられるのだ。

灯子の家は民宿なので、客をもてなすことにも家族の一員として灯子はいっしょけんめい、それは² 島に客がくることをきらっていた竜太には、大きなジレンマにもなった。客に反抗的な態度をとる竜太に、灯子はいろんなことをいった。

「竜太は客をきらいすぎよ。わたしだったらお客さんがくると、うれしい。辰島がいいところですよって、じまんしたくなる」

って、まだきて三カ月もたないのに、よくいってくれたものだ。

「辰島だけがきびしいと思ったら大丈夫がいよ。町の生活にも町の生活なりのきびしさがあるの。それをいやすためにお金をはらって、ここにくる。そのどこがわるいの」

竜太を説得するのにも、灯子はいっしょけんめいだった。灯子にいわれて、はじめて気づいたのは、自分はなんと³ 了見がせまかったんだらう、ということだ。竜太は灯子にひかれていき、感化され、³ いまでは客をよびこむ誘致活動に加担しているのだから、われながらびっくりする。

そしてもつとおどろくのは、灯子にふりまわされているような、こんな自分がいやではないことだ。ひとに指図されるのがきらいで、自分でやろうと思っいても、ひとから「やれ」といわれると、とたんにやりたくなくなってしまう、あまのじゃくタイプだったのに、だ。

灯子には、尊敬できるところといじらしいところの両方あって、いっしょにいると楽しいし……女子には全然関心がなくて、めんどくさいだけだと思っっていたのには、灯子に、

「好きだ」

と告白までしてしまっている。

灯子の飼いだ、みかんの具合がわるくなり、倉部の動物病院へつれていった帰りの船の上のことだった。

灯子が島にきて、自分を変わったと竜太は自覚しているし、変わった自分に好感を持っている。灯子を好きになって、以前の自分より、おとなになったと思っし、心がひろい、いいヤツになれたような気がしている。

灯子にそういったら、「究極のジコチュー」だといわれてしまったけれど……自分ではよくわからない。

⁶ そのとき、ブオツと汽笛が鳴った。

定期船の出航の合図だ。やはり定期よりも早い。波はだんだん高くなっていくという見通しなのだらう。

竜太は立ちあがって、ガラス戸に近づいた。定期船はいままさに岸壁をはなれようとしている。そこに兄の航平がのっているのを確認す

コンをつかって写真やイラストをつける。自分はまえの中学では美術部で絵をかくのは好きだから、イラストを担当してもいい。それを文化祭でくばろう。島のひとたちにもくばろう。あちこちにくばったら島のPRにもなるかもしれない。できれば部活として三カ月にいちどぐらいの発行でつづけていきたい――。

5 灯子は、そうあつく語った。

「材料はいっぱいあると思うの。だれかの網に最近、こんなめずらしいものがかかった、とか、季節のたより、旬の話題、島にやってくるわたり鳥の紹介とか」

事情を話したとき、トクさんはよろこんだ。未来を背負う島の子どもたちが、島のことを知ろうとするのはいいことだと。そして、

「十一月には、はじめてのイベントもあるし、そのまえにあちこちにくばって、島の宣伝をしないと」

といって、中学生で〈辰島ニュース〉をつくるという試みを絶賛した。いまのところ、辰島にくる客は釣りが目的のひとがほとんどだけど、ほかの魅力もアピールして、もっとよびこもうということと、十一月にははじめてのイベントも企画されている。そのための準備委員会がもうけられ、灯子の父や竜太の父、勇気の祖父もそのメンバーだ。

〈辰島市場〉と名づけられているイベントは、倉部漁協が主催するもので、昨年までは、毎年Aの港で開催される〈海の幸祭り〉の中に、Bの〈注7〉ブースがもうけられるという形で参加していた。今年は、同じ時期に飛び地としてここで開催される。Cの

〈海の幸祭り〉は知名度もあり、毎年観光バスで団体客がやってくる。そこからDまで足をのばしてもらおうというわけだ。Eの船が水揚げした新鮮な魚介類を格安で販売し、大鍋もふるまわれるらしい。

日本の沿岸漁業はどこもたいがいそうなのだが、辰島は漁業だけで

は先細りなのだ、おとなたちはいつている。漁獲高はへっているうちに、日本人の魚ばなれと外国産の安い冷凍ものにおされて消費は拡大しない。資源の保護と漁師の生活の保護のバランスを、ぎりぎりのところでたもっているような状況だ。

しかし、だからといって、辰島が観光業でやっていけるはずがなく、だいいちこんな小さな島に客がきたって、高が知れていると竜太は思う。

「まずは知ってもらうこと」

と、トクさんはいつていた。

「ここにきて、この魚を食べてもらうこと」

そうすると、つぎの消費につながる。……かもしれない。つながって、つながって、ゆくゆくは、辰島の漁業の発展になる。……かもしれない。

まるで、細い糸でむすばれたところを、綱わりして進んでいって、ようやくそのさきに輝く未来があるかのような、気の遠くなるほど遠大な計画だ。

でも、みんな、いっしょけんめいなのだ。「まずは知ってもらうこと」のために。

灯子だって……。灯子には、その材料が神社なのだろう。まあ、それもありかもしれない。

「なに？」

灯子が目だけをうごかして、竜太を見た。竜太は無意識のうちに灯子のよこ顔を見つめていたことに気づいて、あわてて灯子書きとっているノートをのぞきこんだ。トクさんの話は、竜太もなんとなくではあるけれど、きいていたのだ。そこには、トクさんの話したことが

竜太はまず感情的に抵抗があった。たまにあそびにくるひとに、「いいところだ」なんていわれたくないし、「なんにもなくて大変ね」と同情されるのはもつとむかつくし、実質的にはゴミがふえて、島はよごれる。しかもそれが「お金のため」であるとしたらなおのこと、「お金のためだから、家の中に他人がはいってこようと、よごされようとがまんしろ」といわれているようで、屈辱的でもあった。

民宿へ東へは、そんな島の方針のシンボルだったし、また、島になじもうとせずに、都会をなつかしんで落ちこんでいる灯子は、竜太にとっては、ゆるしがたいものの象徴だった。

しかし灯子は、みるみるうちに変わっていった。

辰島分校には、本校との合同の行事もあれば、分校独自の行事もある。灯子がやってきてまもなくあった学校祭は、分校独自の行事で、おとなたちを学校に招待して、子どもたちがいろんな演目をひろうする、お楽しみ会のようなものだ。

そこでまず灯子は、地元っ子への第一歩をふみだした。島のひと全員の似顔絵をかいて、それもまた手づくりの、島の大きな地図上の、それぞれが住んでいる場所にはりだしたのだ。それがどんなに大変なことだったか——島民全員、百二十人あまりの似顔絵だ——あれには度肝をぬかれたし、竜太は灯子に一目おくようになった。

灯子は竜太が当初想像していたような、あまっちょろくてヤワな、ただの都会っ子ヒメではなかった。やるときはやるのだ。それは竜太にとっては、ホッとするような発見だった。いつまでも暗い顔をしていられるのは、クラスメートとしてはうっとうしいではないか。

なにがきっかけで、灯子があのようなことをしようと思立ったのか、竜太はいまでもよくわからない。島にきてしばらくしたころ、家族で島をはなれて、もと住んでいた町に買い物にいき、もどってきたとたんにとりつかれたようにかきだしたのだから、そこでなにかがあ

ったのかもしれないと思っている。

とにかく、灯子はその後も着々と島になじんでいき、いまではもう、灯子を「ヒメ」とよぶ子はいない。

そして、灯子の地元っ子への第一歩は、竜太の変貌の第一歩でもあった。灯子が島にきて、いちばん劇的に変わったのは、じつは竜太自身だったかもしれない。

辰島分校の本校との合同の行事としては、十月の末ごろにある二泊三日の修学旅行や、十月なかばに予定されている文化祭がある。

夏休みが終わってまもなく、担任の中野先生から、文化祭に発表、展示するものについて相談するようにとの話があった。

辰島分校の中学校には、部活がなかった。これまで、小学校もふくめた先生たちが、とくいなことを教えてくれる、習いごとみたいなものなるときどきひらかれていた。が、生徒だけできなにかをすることはなかった。だいいち人数がすくなく、できることがなかったのだ。去年、竜太が一年だったときは、三年生にひとりいて、その三年生の生徒が卒業して、勇気が一年生として入学してきたのだから、つねにふたりだったわけだし……。

しかし竜太がそういうと、

「ふたりでも、その気になれば、できることはあったんじゃないの？」と、灯子はきこえよがしにつぶやいていた。竜太はきこえないふりをしていて。

したがって部活動として発表するものもなく、昨年は辰島学級からの発表として、夏休みの自由研究をそのまま展示した。

文化祭の展示など、正直なところ竜太にはまるで関心がなかった。ところが、今年灯子が「辰島ニュース」をつくることを提案した。辰島のことをつたえるローカルな新聞のようなもので、学校のパス

いから、トクさんが引退したら、島の漁師はまたひとりへることになる。このさき、いろんな意味で状況は変わっていくだろう。それにまどわされず、信念をつらぬきとおすのは並たいていのことではないと思えるからだ。

3 竜太は窓のそとへと視線をうつした。

きょうは風が強い。

公民館のガラス戸越しに見える海には、白い波がしらが立っている。トクさんは、いずれにしてもこの日は中学生たちのためにあけておくといっていたが、しけのためにきょうは漁が休みだ。

公民館は港のうしろのやや高台にあり、ガラス戸は南側に面しているので、辰島港が見わたせる。漁船がたくさん係留されている。前後をロープにつながれながら、前後左右にウエーブをえがくようにゆれている。漁がないとき、港のあたりは漁師たちのたまり場になる。隣接する倉庫で網のつくろいなどの陸仕事をしたり、世間話をしながら船の点検やそうじをしたり、なにをするでもなく、海をながめたり……。

船着き場のいちばんはしに、ひととき大きな高速定期船が停泊している。欠航になるかと心配されたが、なんとかやってきてくれた。午前に到着して、島をでていくのは午後三時半だが、この天候では早目の出航になるかもしれない。

ふだんなら、定期船がたまに欠航になろうが、いつ島をでていこうが、まるでむとんちやくなのだけど、きょうはちよつと気になってい

辰島は、周囲三キロほどの島だ。対岸の〈注4〉本土の町、倉部から三十キロほど〈注5〉沖あいにある。人口は約百二十人、ほとんどの世

帯が漁業にたずさわっている。高速定期船が一日一往復、所要時間四十五分で運航しており、スーパーもコンビニもないけれど、生活に必要なものは、倉部のスーパーに電話で注文すると、よく日、定期船ではこばれてくることになっている。だから定期船の欠航は、島の住人には死活問題なのだ。

島には、小中併設の辰島分校がある。

全校生徒は九人、小学生が六人と、中学生が、五月に転校してきた東灯子^{ひかり}をふくめて三人だ。この島の出身だった灯子の父が、ここで〈注6〉民宿を開業するために家族でユーターンしてきたのだ。

辰島にはいま、そこからの客を誘致しようという大きな流れがある。灯子たち一家の民宿も、その大きな流れの一環だった。

しかしそれは、灯子にとっては意にそわない、家族ぐるみとはいえ、島流しも同然のできごとだったことだろう。

実際、はじめのころ、灯子はいつも泣きそうな顔をしていた。そんな灯子を子どもたちは「ヒメ」というニックネームでよんだ。取りあつかいに注意を要する、たいせつなひと、という意味をこめて、子どもたちなりに気をつかいながら、灯子を仲間として受け入れようとしていたのだ。

が、竜太だけは、灯子をふくめた東一家を歓迎する島のムードに逆行して、はじめは反発を感じていた。

辰島は竜太にとって、たいせつなわが家であり、神聖なふるさとだった。離島である辰島は、たしかにふべんだ。定期船が欠航になれば、たちまち生活に不自由する。漁にできるかできないかできないか、つまりかせぐことができるかできないかも天候次第。そんなきびしい環境にあり、自然に左右される暮らしを強いられるからこそ、島はとくべつであり神聖だったのだ。

そこに観光であれなんであれ、よそ者を受け入れるということに、

においてスイッチに指をかける。勇氣は写真の担当だが、録音については打ちあわせていない。勇氣は竜太からすると、ときどき憎たらしいほど気がきく。

竜太は、きょうのところはとりあえずすることがない。

かといって、豊に寝そべってゲーム機であそんでいるわけにもいかず、しびれないようにそつと足をくずしつつ、まじめにきいているふりをするつもりではいる。

トクさんに語ってもらうのは、島にたくさんある神社について。さつそく、すべての神社の名前を書きだし、おおまかなところから説明しはじめた。

「辰島はじめてひとが住みはじめたのは、室町時代のことといわれている。島のいちばん大きな神社は、そのころにできたものだ。もともと住んでいたところから、分社して持ってきたものらしい」

灯子がノートにえんぴつを走らせ、トクさんはときどきそれをのぞきこみながら、ゆっくり話していく。

〈辰島ニュース〉は、中学生でつくる〈注1〉ローカル新聞で、発案者は灯子。創刊号の特集は島の神社、それも灯子の考えだった。

「創刊号はやっぱり、神社よ。なんといっても島のかなめでしょ」

辰島は小さな島のわりには、神社が多い。それも、ひなびていて素朴で、だからこそ神聖な感じがすると灯子はいうのだ。辰島で生まれ育った竜太は、古びてありふれた〈神社はたいがい古びているだろう〉神社としか感じたことはなかったし、どれも海や漁業に関係した神がまつられていることぐらいはわかっていたけれど、それぞれの神社のくわしい由来など知らうとしたこともなかった。

「知らないの？」

あきれた、とばかりにいわれて、テーマはそれにすんなり決まった。

というか、反論の余地がなかった。そしてまた、辰島にきてまだ日のあさい灯子にそういわれるのは、快感でもあった。自分の知らない自分のよさを、他人に発見されているようなものだったからだ。

だったら、トクさんにきいてみようと、島の住人を知りつくしている、竜太が人選をした。トクさんは、かつては島の区長として神社の係をまかされたひとでもあったし、物知りで島のひとたちの人望もあつた。それに、どちらかという口べたで人前で話すことを苦手としている島の漁師の中では、きちんと論理的に話ができるひとだ。

連絡をとって事情を話し、つごうのいい時間と場所の打ちあわせをしたのは、竜太だ。きょうは灯子と勇氣ががんばっているが、竜太だって、すでに役目ははたしているのだ。きょうのふたりの働きにくらべると、全然努力がかかかっていないにしても。

竜太はトクさんの声をききながしながら、トクさんをぼんやりとながめた。赤銅色の肌、深いしわ、いかにも漁師らしい風貌の持ち主であるトクさんは、この島で生まれ、この島で父親のあとをついで漁師になった、〈注3〉きつすいの辰島人だ。子どもは娘がふたり。

ふたりとも島をでて、家庭を持っている。孫は四人、祭りのときや正月には家族そろってあそびにくる。

七十六歳だったらもう引退してもいい年なのに、ひとり暮らしをしながらも、現役で漁師をつづけているのは、海にでて漁をすることがトクさんの生きがいになっているからなのだろう。

竜太はトクさんを尊敬している。竜太自身も、父と祖父ののついで船をひきついで、高校をでたら漁師になるつもりでいる。

けれども、自分もトクさんのように生きていけるかどうかについては、確固たる自信はない。島もそして島の漁業をとりまく環境も、将来の見通しはけつして明るくない。現に、トクさんには後継者がいな

ができず、何かをしようという意^④もわかなくなってしまう。

前頭前野の働きをほかの霊長類と比較すると、サバンナに出て環境に適応したヒトが、他人の心を読んで^③「c」作業をし「d」生活を営むようになった、という進化の過程がわかるのである。

人間の脳は、だからだと何となく大きくなっていったのではなく、サバンナに進出したときと、ホモ・サピエンスが登場したときに、一気に大きくなった。その二度の拡張の際、ヒトがどのような^カコンナに直面し、切り抜けていったのが、現在の自然人類学で一番おもしろい部分なのだ。

(長谷川眞理子「ヒトはなぜヒトになったか」より)

※出題の都合上、本文の一部を改稿しています。

〔注1〕 サバンナ：熱帯雨林と砂漠の中間に分布する草原地帯。低木も点在する。雨季には丈の高い草が茂り、乾季には枯れる。

〔注2〕 霊長類：サルの特徴を持った哺乳類を呼ぶ語。サルとヒトを含む。

問一 部ア、イ、カのカタカナを漢字に直しなさい。

問二 部A、Dの漢字をひらがなに直しなさい。

問三 空らん①④にあてはまる言葉を次の中から選び、記号で答えなさい。

- ア ゆえに イ しかし ウ そこで
エ だから オ つまり カ では
キ ともかく ク また

問四 空らん①③には「こ」「そ」「あ」「ど」のどれが入ります。あてはまる字をそれぞれ書きなさい。

問五 空らん「a」「d」にあてはまる言葉を、本文中からぬき出して、それぞれ漢字で書きなさい。字数は一字または二字です。

問六 空らん②⑤に入る漢字一字を考えて書きなさい。

問七 次にあげるア、エの出来事を、古いものから順に並べなさい。

- ア 森林から出て行く必要性が生じた。
イ 石器を使つての狩りを始めた。
ウ ヒトとチンパンジーとの進化の方向が分かれた。
エ ホモ・サピエンスが登場した。

③ 次の文章を読んで、あとの問いに答えなさい。

九月の最終土曜日、午後二時。

1 下出徳治、通称トクさんは、^①辰島ニユース創刊号の取材に際して、約束の時間どおりに公民館にあらわれた。手にしていた分厚い書類のようなものをテーブルにおくと、そのまえにどっかりとあぐらをかいてすわる。

二年の灯子と竜太、一年の勇氣、あわせて三人の中学生は、十五分まえにあつまっていた。灯子が、

「きょうは時間をとってもらって、ありがとございました。よろしくお願いします」

と、すこしうわずつた声であいさつをする。三人は灯子を中心にして、トクさんのむかい側にならんで腰をおろした。

トクさんは七十六歳、数年まえに奥さんに先立たれひとり暮らし、以前は親戚の若者をやとって底引き網漁をしていたが、いまはひとりでもできる小規模な刺し網漁をやっている。定期的に訪問している診療所の医師には、健康優良老人だとの太鼓判をおされている、ばりばりの現役漁師だ。灯子のまじめ優等生的なあいさつに、「おう」とこたえ、三人を笑顔で見まわした。

灯子がノートとえんぴつを用意する。トクさんとは面識ぐらいはあるだろうが、まともに相対するのは、たぶんきょうがはじめてだろう。勇氣が、カメラと小型の録音装置を取りだした。録音装置をテーブル

し、そもそもそんなに長距離を走るようにはできていないのだ。ヒトの特徴の一つとして、長距離移動が可能であることが挙げられる。チーターなどは高速で移動できるが、長距離は走れない。ii) れも汗腺と同じように、サバンナに適応し生き抜くための、ヒトの進化である。

次に、食べ物の問題がある。iii) れまでは樹木が生い茂る森で、木々の葉っぱや果実をもぎとって食べていればよかった。しかし、サバンナにはヒトが簡単に手に入れられるような食料は、ほとんどない。シマウマのような、タンパク質の塊ともいえる草食動物が多く生息してはいるが、ヒトは肉食動物ではない。肉食動物はつめやきばを持ち、ほかの動物を食料にできるが、木の上で暮らしていた(注2)霊長類が簡単にほかの動物を狩ることはできなかった。では、植物はというと、こうした過酷な場に生息する植物は水分をあまり含んでおらず乾燥しているものが多い。また、外殻が硬かったり、水分を含む実の部分には地面を掘らなくてはならないが、器用さを重視した手なので、つめで掘り進むこともままならなかった。

2) 彼らはこの難局にどう適応していったのか。一つは、食料をカクホするために、自然を利用して非力さをカバーする道具を製作し、活用することを覚えた。石器を使つての狩りや、食物採取である。

そしてもう一つ、目標のために役割分担し複数で共同作業をすることを知つたのである。それまでのように、一人ひとりが群れの中で勝手に暮らすのではない。群れという組織において、互いが自分と相手の果たすべき役割を理解し、目標達成のために何をするかを考え、いっしょに行動する。群れ全体が自分の立ち位置と役割を意識する集団となり、こうした社会関係の理解こそが、類人猿とは異なる、ヒトをヒトたらしめた最大の分岐点になつたのだ。このときを契機として、

ヒトの脳は著しく進化する。やがてヒトは、ほかの動物と比べて格段に大きな脳を持つようになった。これは過酷な環境でヒトが編み出した、生き抜くために必要な進化だつたといえるだろう。

人類は二足歩行に加え、大きな頭部を持つように進化したが、その頭部で特に大きいのが脳である。最初から大きかつたのではなく、300万〜400万年前の時点では、チンパンジーやゴリラとあまり変わらなかつた。

3) サバンナに出て行き環境に適応したホモ属が出てきた頃から、一度、キウゲキに大きくなる。その後しばらく、大きさは変わらないが、現在のホモ・サピエンスが登場したときに、またもう一段大きくなつたのである。

実際に脳の大きさを比較してみると、チンパンジーの脳の容量が約380ccであるのに対し、ヒトは約1400ccある。しかも、進化の過程で単純にチンパンジーの脳がそのまま大きくなつたということではなく、目の裏側の部分から頭のでっぺんにかけて、おでこ周辺にある前頭前野という部分が特に大きくなつていたので。

その前頭前野とは、何を司る部分なのか。脳の働きは解析されてきたが、前頭前野にあたる部分がどのような機能を持っているかは長年わからなかつた。近年ようやく、前頭前野は「自分を「**あ**」観的に見る」感覚を司つてることがわかつてきた。自分が何をして、何を感じているか。そして他人が何を思い、どう感じているか。自分の気持ちを参照しながら、相手が何を感ず考えているかを知るための器官なのだ。4) 自分が何を欲しているかということもモニターしているのだ。それと連動して、目標を達成するために、次に何をしなければいけないかといった物事の優先順位を決める役割もある。

これは言語能力などとは別々に管理されており、例えば事故で前頭前野をオンショウしてしまつても、言葉や記憶、思考には問題ない。しかし、他人の気持ちを読みなくなつたり、次にすべきことの判断



平成二十八年年度 慶應義塾湘南藤沢中等部

【国語】(四五分)〈満点…一〇〇点〉

※解答に句読点や記号などが含まれる場合は一字に教えます。

一 次の問いの□には、それぞれ同じ漢字が入ります。何が入るか考え、例にならって漢字二字を答えなさい。二つ目の□に「タ」が入る場合も、同じ漢字がくり返し入るものとして答えなさい。

〔例〕□□交換：物物 または 物々 が入る↓〔答〕物
大丈夫です。ほくは自信□□です。

② □□な目にあう。

③ その危険性は、□□承知しております。

④ 夜が□□とふける。

⑤ □□に火の手があがる。

⑥ 会議は□□一昼夜におよんだ。

二 次の文章を読んで、あとの問いに答えなさい。

君たちが使っている教科書にはまだ記述はないのだが、チンパンジーと分かれて二足歩行を始めたこの時点では、ヒトの祖先は平原ではなくまだ森林で生活していた、と最近の研究で考えられている。ひと昔前までは、ヒトは生活の場を森から平原に移し、その影響で二本足で歩くようになったとされていたのだが、森での生活の時点ですでに二本足で歩いていたことがわかった。この頃の類人猿は、二足歩行をしつつ、木登りもできるような体つきをしている。

1 チンパンジーとアケイトウが分かれて、すぐに生活の場が平原に移ったわけではなく、しばらくはまだ森と平原の両方について

生活していた。〈a〉に出るために二足歩行になったというシナリオは理解しやすいのだが、〈b〉で暮らしている段階から、なぜ二本足を使うようになったのかは、現在まで解明されておらず、謎のままである。

現在のヒトと完全に同種の体格が見られるようになるのは、約160万年前にA 生息していたホモ・エルガスタという種類からである。この頃から、森から平原に出て、長距離を二足歩行で移動し生活していたと考えられている。

では、なぜヒトは過酷な平原・〔注1〕サバンナに進出していったのか。実はその時代、地球上では乾燥・寒冷化が進んでおり、生息地であるアフリカの森林が少なくなっていた。その際に、最後まで残された森林にしがみついていたのが現在のチンパンジーであり、環境変化のためにサバンナに行かざるを、イエなかつたのがヒトであった。森林をチンパンジーたちにとられてしまったともいえるが、外の世界に出て行かなくてはならなかったことが、後の進化につながることもある。

森林からサバンナに出た彼らを待ち受けていたのは、大変に過酷な生活環境であった。まず、水がほとんど存在しないのだ。水場がところどころに点々としかないので、水場から水場へ歩いて移動するにも長距離を移動しなくてはいけない。そして気温が高いので、汗をどんだんかいて体温調節をする必要がある。〔1〕の環境のために、彼らは体毛を失い、代わりに汗をかくための汗腺という器官が増えたと考えられる。600万年前、チンパンジーと分かれたばかりの頃はまだ毛むくじやらだつたはずで、本当に毛をなくさなければいけなくなったのはサバンナに進出した200万年前ぐらいからであろう。

私たちヒトは暑さで汗びっしょりになるが、こいつ、哺乳類は実はあまり汗をかかない。ウマは汗をかかぬが、イヌやネコはそんなに汗をかかない

国語解答用紙

番号		氏名	
----	--	----	--

評点	100
----	-----

〔注意〕 解答に句読点や記号などが含まれる場合は一字に数えます。

①	②	③	④	⑤	⑥
---	---	---	---	---	---

二	問一	ア		イ		ウ		エ		オ		カ	
	問二	A		B		C		D					
	問三	1		2		3		4		問四	i	ii	iii
	問五	a		b		c		d		問六	あ	い	
	問七		→		→		→						

三	問一		→		→		→		→		→	
	問二		問三									
	問四	(1)		(2)		(3)						
	問五	ア		イ		ウ		エ		オ		カ
	問六											
	問七	A										
		B										

四																				

〔注〕 この解答用紙は小社で作成いたしました。

〔国語〕 100点(推定配点)

一、二 各2点×30 <三>の問7は完答 > 三 問1～問4 各2点×6 <問1, 問3は完答, 問4は各々完答> 問5 各1点×6 問6 各2点×2 問7 各3点×2 四 12点